

# 家から海へ

白浜で出会った生きものたち

52

京都大学助教授 久保田 信 (京都大学 瀬戸臨海実験所)

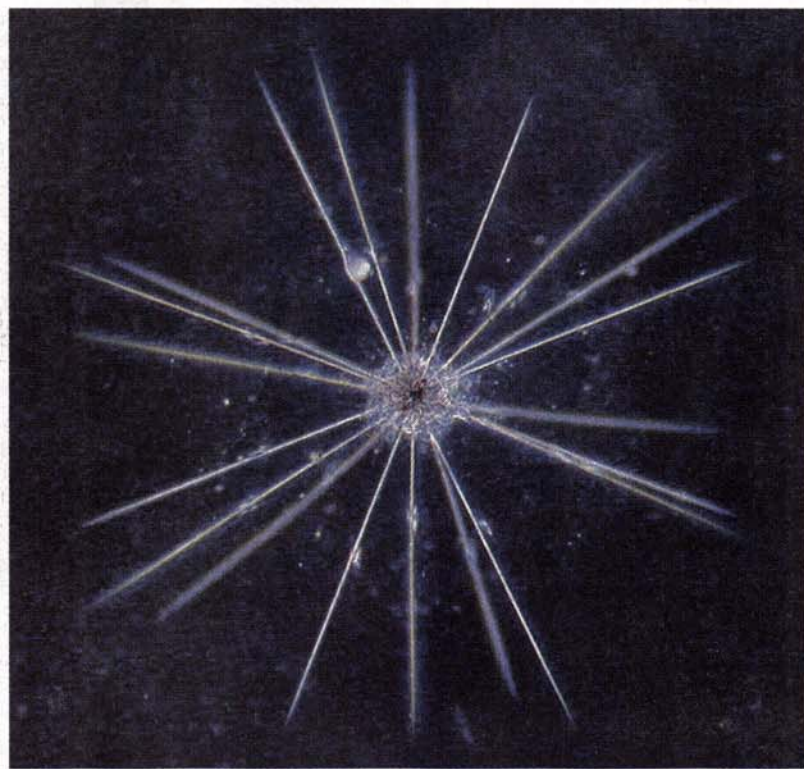
## 京大と他大学の合同実習

9月に京大産生対象「水平びき」と異なり、の臨海実習の2回目と、全国の大学からの希望参加者で実施する公開臨海実習を合同でした。8月の1回目とは打って変わって晴天に恵まれ、海へのアプローチも楽だった。海洋調査実習船ヤンチナも出航でき、観察に必要な沖合や湾奥でのプランクトンのサンプリングもできた。

はいえ、実習室に持ち帰るまでに、狭い容器に密集させていると、食い合ったり、傷付け合ったりする。プランクトンには、な変温動物なので、体がかじかむと動きも鈍くなる。この状態だと、この後すぐ行う顕微鏡観察で

他の終生プランクトンでは、刺胞動物門ヒドロ虫綱の管クラゲ類が捕れらる。ロケット型の透明なクラゲでダッシュするよう

性クラゲであるが基本単位は小さいのだ。軟体動物の翼足類(よ



終生プランクトンの放散虫類(原生動物門)の一種

「初めてこんなにくさきだめばのぞき込むほどたくさんのプランクトンが見えてきて興味深かった。一つ一つ丁寧にスネッチをとりつくと、体の中まで透けて見えて小さい生物の中にも精密な構造が見えて感動」

「初めにこんなにくさきだめばのぞき込むほどたくさんのプランクトンを見た。肉眼ではホコリのように見える小さいシャレーの中の世界には、無数の生き物たちがいて、どれも個性的な形、動き、色をしていた。よつできていて、不思議な気分になった」

# プランクトン観察に感動

今回は目の細かいプランクトンネットで、湾口では31℃、湾奥では15℃の深さから垂直に引き上げる「垂直びき」をした。船の推進力で引っ張るだ。いくら現場に近いと

も、フレッシュなままの形がよく分かる。やがて温度が上がってきて動き始める。この時の観察も重要である。

一生、浮遊生活を送る終生プランクトンと、生活史の一時だけプランクトン生活を送る一時プランクトンの両者に注目して観察する。細かく分けて40ほどに区分されている動物門の中で、たった2門だけが、卵から親までプランクトン生活を送る。それは、クシクラゲ類の有櫛動物門とヤマシ類の毛顎動物門で、今回は2門とも採集できた。

個体数や種類が多いため、まず目に付くのがケンジシコ類。触覚が長く滑るように游泳する。ほっそりとした腹部に続く尾の両わきに多数の卵を一塊にしている個体もいた。ノープリウスという幼生から何度も脱皮を重ねて、体の節をふやしながら親になる。

次に多かったのがオタマボヤ類。ホヤ類の親類だが、その幼生のオヤマジャクシ幼生が尾まで真っすべに伸びて、ずんどうな体のホヤ類とは違う。オタマボヤ類は、胴体から垂直に垂れ下がっている一本の長く平たい尾を持ち、前後に打ち振って泳ぐ。この尾の中に脊索(せきさく)が一本筋のように通っている。脊索は私たちの背骨に相



終生プランクトンのオタマボヤ(脊索動物門)の一種



終生プランクトンのケンジシコ類(節足動物門)の一種

「普段見られない生き物がたくさん見られて良かった。いっぱいいたのですべてを見ることはできなかったが、小ケースの中の『小さな海』はとても楽しかった」帝京科学大、原田知子さん。

「一時プランクトンは大変面白い。二枚貝の幼生にとっても感動した。形は成体と同じようであるが、貝殻の間から円盤状の足のようなものを出している。成体からは想像もできないような俊敏さで泳いでいた。プルテウス幼生の成体と全く結びつかない形態にも面白さを感じた」

「一時的に面白さを感じた」

「一時的に面白さを感じた」